

大仙市「刈和野の大綱引き」

大仙市は本年度、国重要無形民俗文化財「刈和野の大綱引き」の綱に使う稲を地元の小中学生と高校生が育てるプロジェクトを始めた。行事を担う後継者の育成と、稲わらの確保が狙い。児童生徒は初の活動として、地元の田んぼで苗を手植えた。

後継者育成と稲わら確保へ

大綱引きは500余年なっている。

りの歴史があり、2月10日に開催。約64日と約50日の大綱計2本を毎年新調している。綱の材料となる稲わらは計20トンを。前年の秋に手作業で専用の刈り取り機で刈り、天日干した長さ1メートルほどのものを編み上げで作る。

市によると、綱作りは地域の住民が担っているが、高齢化とともに作業に参加する人が年々減少しているという。農作業の機械化に伴い、稲わらの確保することも難しく



昨年の大綱引きで使用された大綱（大仙市提供）

大綱用、小中高生手植え

仙北高の全校生徒74人が参加。刈和野大綱ファームの職員や刈和野大綱引保存会メンバーのアドバイスを受けながら、計80畝の水田に丁寧に苗を植えていった。

初めて田植えを経験したという西仙北小の藤原結愛さん(10)は「力強く大きい稲に育ってほしい。おとし大綱引きを見て楽しかったので、来年も行きたい」。児童生徒は秋に稲刈りをするし、稲わらを天日干しする「はき掛け」も行う予定だ。

子どもたちの田植え作業を見守った保存会の今野幸宏会長(66)は「楽しんで作業している姿を」

(佐藤和輝)



田植えに挑戦する西仙北小の児童=21日

生 職 業 就 業 1 た 路 に け た 有 し 有 一 ス ル 者 の 隔 こ 対 困